

## はじめに Preface

北海道大学理学研究科 加藤 幾芳

Kiyoshi Katō  
Graduate School of Hokkaido University

今年の冬は世界的に雪の多い年と伺っているが、確かにもう3月の半ばを過ぎようとしているのに、札幌は今日も雪で、窓の外は降る雪で真っ白である。このような気象の問題にかぎらず、今や我々を取り巻く様々な問題は Locality を失い、世界的規模の問題としてあらわれてくるようになった。身近な問題としては、インターネットである。今や、電子メール、WWWなど地球の裏側とも即座に極めて日常的に情報を交換することが可能となり、これまでの情報交換の在り方を大きく変えつつある。核データについても同様で、この間世界各地の核データセンター間のネットワーク再編の議論がなされて来た。その最終報告書が IAEA (International Atomic Energy Agency) から出されることになっている。

国際核データネットワークの中で、現在我々グループ (JCPRG) が果たして役割は、日本国内で得られた荷電粒子核反応実験データをまず NRDF と呼んでいるデータ・ファイルに収録し、それを国際データ交換フォーマット (EXFOR) に変換して IAEA に送付していることである。もう1つの役割は、世界各核データセンターから IAEA に集積され EXFOR ファイルにコンパイルされたデータが、IAEA から我々の所にテープで送付されて来る。このデータを国内の研究者に使ってもらうようにすることである。

インターネットがますます発展する中でこれらの役割をどのように果たして行くかと言う問題が新たな問題であり、緊急に対応しなければならない問題となっている。NRDF に収録されたデータは特定の利用目的を持ったものではなく、反応断面積の角分布等も収録されており、EXFOR とは異なった独自性を有するデータベースである。従って、NRDF のデータを研究者に提供するシステムをインターネット上で可能にすることは大変重要であると考えられる。また、EXFOR のデータについても、インターネットを用いて世界中何処からでも使えるようにしなければならない。今回の NRDC (Nuclear Reaction Data Centers) の会議でもこの問題が取り上げられ意見交換が行なわれ、早急に実現に向けて努力することになった。近い将来、インターネットを用いた核データの利用の仕方が大きく変わることが期待される。